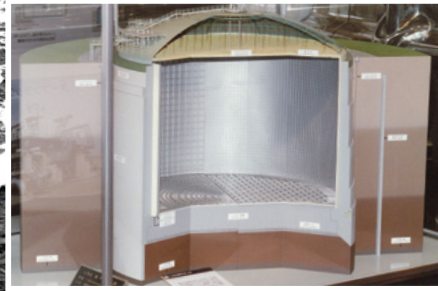




◀昭和44年11月、日本にはじめてLNGを運んできたLNGタンカー「ポーラアラスカ」号。



▲昭和45年、東京ガスが世界ではじめて実用化に成功した地下式のLNG貯槽タンク(模型)。

ガスと暮らしのモノがたり ◆最終回◆

未来へ

持続可能な暮らしをつくり続けるガス



これまでさまざまなガス機器と暮らしの変遷を紹介してきましたが、締めくくりは「ガス」それ自体のモノ語りを紹介します。

都市ガスの原料は石炭から石油を経て現在は天然ガスが主流となり、大部分がLNG (Liquefied Natural Gas) 液化天然ガス)のかたちで輸入されています。天然ガスはマイナス162℃に冷やすと気体から液体になり、体積が約600分の1に縮小します。これにより大量輸送が可能になり、大型のLNGタンカー1隻で25万世帯以上が1年間に使う量を1度に運んでいます。調達先はアジア、オセアニア、中東、ロシアなどで、まもなくアメリカ本土も加わろうとしています。

LNGの輸入は昭和44(1969)年11月、東京ガスと東京電力が共同でアラスカから受け入れたのがはじまりです。導入に向けた検討は昭和30年代初頭にさかのぼり、正式に決定したのは昭和35(1960)年のこと。世界各地に豊富に埋蔵され、不純物の含有が少なくク

リーンで、熱量(カロリー)が高いといった理由から、次世代を担うエネルギーとして導入を決めたのです。

すでに半世紀以上前に、現在謳われている天然ガスのメリットが注目されていたのです。とくにクリーンなエネルギーという切り口から将来性を見出した点は、特筆に値します。また昭和34(1959)年には、アメリカとイギリスの共同実験によるLNGタンカーがはじめて大西洋の横断に成功。天然ガスを液化して輸送する技術的な目処が立ったことも、導入の決定を後押ししました。

さらなる安定供給に向けたLNGタンカーの建造は日本の造船業の牽引役を担うまでになり、都市間を結ぶパイプラインやLNG基地の整備も各地で進んでいます。

天然ガスの利用方法も進化を続けています。たとえば家庭用燃料電池(エネファーム)はマイホーム発電を身近にし、電気とお湯の両方をつくる省エネルギーを実現。太陽光とのダブル発電や太陽熱との給湯システムなど、再生可能エネルギー導入の一翼を担っています。これからも持続可能な未来の実現と豊かな暮らしの創造に向けて、ガス業界はフロンティアを切り拓いていきます。

GAS MUSEUMがす資料館



「GAS MUSEUMがす資料館」は「ガス灯館」(写真左/東京ガス本郷出張所を移設復元)と「くらし館」(右/千住工場計量器室を移設復元)からなり、ガスと暮らしの歴史を伝えるさまざまな展示を目にすることができます。

東京都小平市大沼町4-31-25
Tel.042-342-1715

開館時間 10:00 ~ 17:00
休館日 月曜日、年末年始(月曜日が祝日および振替休日の場合は翌日が休館)
入館料 無料